研　究　紀　要

国　語　部　会

実践発表１
「文学館と教室をつなぐ現代詩歌の授業デザインー魅力発信型プレゼンから創作の世界へー」
青森県立青森東高等学校　武　永　佐知子……　1

実践発表２
「授業で『こころ』全編を読む」
青森県立三戸高等学校　川　﨑　孝　雄……　3

公開授業・研究協議
国語表現　青森県立黒石高等学校　長谷川　さと子……　4
古典探究　青森県立黒石高等学校　寺　内　清　裕……　5

部　会　の　動　き　……　7

研　究　テ　ー　マ　……　8

紀要編集委員　田　村　拡　己（青森県立八戸商業高等学校）

国　語　部　会

実践発表１

文学館と教室をつなぐ現代詩歌の授業デザイン
―魅力発信型プレゼンから創作の世界へ―

発表者　青森県立青森東高等学校　武　永　佐知子
助言者　弘前大学教育学部国語教育講座助教　帆　苅　基　生
　　青森県総合学校教育センター指導主事　青　木　雅　俊
司　会　青森県立弘前高等学校　太　田　雅　子
記録者　青森県立弘前高等学校　伊　藤　景　子

１　研究のねらい

・現代詩歌（詩・俳句・短歌）の授業における指導のしにくさと創作活動の評価の難しさという課題を解決する。
・日本近代文学館のセミナーで得た知見を生かし，生徒が教師の解説を受け身で聞くのではなく，自ら言葉に着目して作品を読み解く授業を構想する。
・創作活動では作品の優劣ではなく，創作に向き合う姿勢を重視し，生徒が安心して表現できる学習環境をつくる。

２　研究の概要

１年生「言語文化」で全８時間の単元を実施。前半５時間では，三好達治・中原中也・茨木のり子の詩を題材に，グループごとの「魅力発信型プレゼンテーション」を実施した。生徒は作品の魅力を調査し，クイズや音楽，イラストなどを活用しながらクラスメートに紹介した。発表後は質疑応答と教師による補足解説を行った。後半では，与謝野晶子と石川啄木の短歌を共同的に読解した。単元の最後に，「ありがとう」の５文字を用いた折句による短歌創作活動を実施した。「作品の出来では評価しない」「100％フィクションでもよい」とあらかじめ伝え，創作への心理的負担を軽減した。

３　研究の成果

プレゼンテーション活動を通して，生徒が詩の魅力を他者に説明するために，言葉を根拠として論理的に読解する姿勢を身に付けた。短歌の読解では，「なんとなく」の感想ではなく，作品中の語句に着目した根拠ある解釈が増加した。ペア活動においても，多様な解釈を認め合いながら話し合う質の高い鑑賞が見られた。創作活動では「難しかったが楽しかった」という感想が多く，生徒の創作への抵抗感が軽減された。自ら創作することで，詩人や歌人の表現の巧みさに気付く生徒が見られた。その後の授業や年度末の表現活動でも，生徒が主体的・能動的に学習へ取り組む姿勢が確認された。

４　今後の課題

今回のプレゼンテーションは，解説動画等を活用して準備したものであるので，今後は生徒が自力で読解した内容をプレゼンテーションする授業をデザインできればと考えている。今後も，文学館等の文化施設から発想のヒントを得ながら，授業をデザインしていきたい。

５　講評

・（帆苅先生）創作活動を，才能の有無のランク付けなどの評価から切り離し，文学や詩を国語の授業の一環として『言葉を味わう場』として提供することの意義を改めて感じた。特に「100%フィクションで良い」というアプローチは，青森県が生んだ先駆的な文学者である寺山修司が短歌を創作する際に提示した考え方，短歌における「私」をあえてフィクションとする手法とも深く通じるものがある。この視点は，創作のみならず鑑賞活動へも広く応用できると考える。

・（青木指導主事）言葉に目線が向いており，指導書にあるような細かい技法ルールを教え込むことよりも，活動の狙いが的確に生徒に伝わったことで，生徒の目線が「言葉」そのものに強く向いていると感じた。「言葉による見方・考え方」が主体的に発揮され，創作活動に対する心理的ハードルを下げながら，読解と創作を往還させた授業構成は，現代詩歌指導の有効なモデルとして示唆に富む実践であった。

実践発表２

授業で『こころ』全編を読む

発表者　青森県立三戸高等学校　　川　﨑　孝　雄
助言者　弘前大学教育学部国語教育講座助教　　帆　苅　基　生
　　青森県総合学校教育センター指導主事　　青　木　雅　俊
司　会　青森県立弘前高等学校　　太　田　雅　子
記録者　青森県立弘前高等学校　　伊　藤　景　子

１　研究のねらい

・高校国語教材として扱われる夏目漱石『こころ』について，教科書掲載部分のみでは作品全体の理解が十分に深まらないという課題意識から，生徒に作品全体を読ませる授業実践を行う。
・長編小説を通読することで，登場人物の人物像や心情，伏線構造などを総合的に捉えられる読解力を育成する。
・コロナ禍等で学習活動が制限された生徒に対し，「授業だからこそできる読書体験」を提供すること。

２　研究の概要

３年生（後に２年生）を対象に，『こころ』全編を授業内で継続的に読ませる実践を行った。青空文庫の全文を活用し，配布用教材を独自に作成した。授業の冒頭約５分間を利用して少しずつ読み進める形式を採用した。読み進める際には，語句や時代背景，伏線などについて教師が適宜解説を加えた。教科書掲載部分だけではなく，「上」「中」「下」すべてを読むことで，作品全体の構成や主題の理解につなげた。生徒が継続的に作品世界へ触れられるよう，日常的な読書活動として位置付けて実施した。

３　研究の成果

生徒が登場人物に対して独自の評価や解釈を行うようになった。例えば，「先生」の人物像や考え方について，自分なりの視点から意見を持つ姿が見られた。Kの自死の理由についても，自身の価値観と結び付けながら考察する生徒が見られた。教科書掲載部分のみでは得られない，全体像を踏まえた読解が可能となった。生徒は物語冒頭の出会いの場面や散歩の場面など，作品全体を通して印象に残った箇所を挙げることができた。『こころ』が手紙形式を含む複雑な構成であることや，伏線を張り巡らせた作品であることに気付くことができた。新聞連載小説として発表された作品の特徴や面白さを体感できた。教師による補足説明により，難解な語句や時代背景への理解が深まり，読書への意欲向上につながった。

４　今後の課題

・限られた授業時間の中で，長編作品全体をどのように効率よく読ませるかについて，さらなる工夫が必要である。
・授業進度を調整しながら，多くの作品や文章に触れさせる機会を確保する必要がある。
・全編読解によって得られた学びを，他作品の読解や文学理解へどのように発展させるかが課題である。
・生徒の興味・関心を維持しながら継続的な読書活動へつなげる指導方法の検討が求められる。

５　講評

・（帆苅先生）授業の中で『こころ』の全編を一緒に読み進める場を提供したことは，当時の読者が毎日の新聞連載小説をワクワクしながら読み進めた感覚を，授業を通じて現代の生徒に追体験させる構成になっている。この経験は非常に重要であり，国語教育における文学の扱いが揺らぐ現代，ＡＩの時代に再び文学が必要とされている今だからこそ，授業で文学を扱う重要性を再認識させる実践であった。
・（青木指導主事）生徒たちが『こころ』の登場人物に対し，自分の言葉で非常に多様な解釈を述べており，生徒が教科書の正解に縛られず，多様な解釈をアウトプットするためには，教室の「精神的安全性」が担保されている必要がある。川﨑先生が日頃から作り上げてきた「温かく，心理的に安全な授業の雰囲気」があってこそ実現できたものである。

国語表現

授業者　青森県立黒石高等学校　　長谷川　さと子
助言者　青森県総合学校教育センター指導主事　　青　木　雅　俊
司　会　青森県立弘前高等学校　　太　田　雅　子
記録者　青森県立弘前高等学校　　西　谷　ともえ

１　授業教材等

第２部「表現を楽しむ」［国語表現（大修館書店）］
「校歌～幻の４番を作詞しよう～」

授業は，7 月１，９，13，14 日に行われたものを録画し，58 分に編集したものを放映する形で実施した。

２　協議

1）授業者からの振り返り（代読　青森県立黒石高等学校　森紀子先生）

授業者からは，公開授業の目標として，生徒が楽しみながら活動できること，また他者と協働して課題に取り組む力を育むことが示された。教材選定では，情報デザイン科の生徒の特性を生かし，「言葉・イラスト・歌」を組み合わせた校歌の創作活動が設定された。

成果として，生徒が仲間と楽しい時間を共有し，完成した作品に愛着を持てたことが挙げられた。一方で，創作された歌詞の中には既存の校歌との関連性や全体の統一性が弱いものもあり，言葉の選び方や構成面の指導に課題が残るとされた。

2）参加者からの感想・意見等

- 校歌の構成を事前に分析し，風景・理念・地域性などの要素を踏まえて創作へ導いた点が有効であった。
- 創作活動では，一定の条件や枠組みを与えることで，生徒が考えやすくなることが確認された。
- 国語表現の評価，特に相互評価や自己評価の扱いには難しさがあるとの意見が多く出された。
- 自己評価は生徒の主観に左右されるため，そのまま評価に用いるのではなく，記述内容や授業中の様子，成果物と合わせて総合的に判断する必要がある。
- 作品発表後に他者からの助言を受け，再度作品を修正・改善する過程を設けることで，学習の調整や粘り強い取り組みを見取りやすくなるのではないか。

3）主体的に学習に取り組む態度の評価について

協議では，「主体」という言葉が生徒の人間性や普段の姿勢の評価に広がりやすいことが確認された。そのため，評価対象はあくまで「主体的に学習に取り組む態度」であり，具体的には「粘り強く学習に取り組むこと」と「自らの学習を調整すること」の二つの視点から捉える必要があると整理された。

参加者からは，振り返りシート，自己評価，相互評価，成果物，授業観察，提出物，テスト等を組み合わせて評価する実践が紹介された。ただし，振り返りシートは形式化すると生徒が表面的に記入する可能性があるため，評価に結びつく問いの設定や，単元前後の変化を記述させる工夫が必要であるとされた。

4）助言者より

助言者からは，今回の授業を国語表現の「書くこと」の指導事項，特に（１）カ「推敲」と関連付けて捉えることができるとの助言があった。生徒が作成した歌詞を発表し，他者からの意見を受けて終わるのではなく，その意見を踏まえて再度作品を改訂する活動を設けることで，学習の調整や粘り強い取り組みをより明確に見取ることができる。

また，生徒の中に「音楽の授業のように感じた」という受け止めがあったことを踏まえ，国語科としての学びを生徒に明確に意識させる必要性も指摘された。歌唱そのものではなく，言葉を選び，構成し，他者に伝わる表現へと高めていく過程に焦点を当てることが重要である。

古典探究

授業者　青森県立黒石高等学校　　寺　内　清　裕
助言者　弘前大学教育学部国語教育講座助教　　帆　苅　基　生
司　会　青森県立弘前高等学校　　伊　藤　景　子
記録者　青森県立弘前高等学校　　葛　西　将　之

１　授業教材

花と和歌　～Flower ＆ Poetry

２　授業者より

授業を行った学級は明朗で素直な生徒が多く，国語の授業では，他者との交流をとおして考えを深める活動に積極的に参加している。イタリアからの交換留学生（ダニエル）が週２回当科目の授業に参加しているが，彼を受け入れるにあたってはお客様扱いをせず，日本とイタリアの文化比較を通じた異文化理解に資する「教材提供者」と位置付け，また彼自身も大変意欲的に授業に参加している。授業を行う上で重視した点として，

⑴　生徒自身がネットを活用して無限の選択肢の中から和歌を自ら選び，またその和歌を選んだ理由を言語化すること。

⑵　他の生徒が選んだ和歌を，ロイロノートを利用して共有し，その中から二つ良いと感じたものを書き留めること。

が挙げられる。デジタルとアナログのメリット，デメリットを考慮し，より効果的な理解がなされるように工夫した。これを踏まえて授業の本題である「『花』をどう捉えるか」という比較文化的なテーマに進みたかったが，

○　時間的制約もあり，「花」の象徴性への深化した考察活動があまりできなかった

○　文法事項の学習が進んでいないため，実効的な学力伸長につながりづらい

○　ダニエル自身はどの程度理解しているのかを確かめづらい（英語コミュニケーション能力の重要性）

といった反省点が残った。

３　他の授業での実践内容

⑴　『枕草子』の授業：英語訳やローマ字を併記したプリント等をダニエルに協力してもらって作成したが，あっという間に作ってくれた。現代語訳や英訳，ローマ字を併用することで彼の勉強にもなっていた。

⑵　『伊勢物語』の授業：「初冠」等の定番教材を扱った。男が着ていた狩衣の裾を切り取って歌を書いたというエピソードについて，なぜそうしたのかを問いかけた際，「言葉の力をより強くするため」「歌をパワーアップさせるため」といった面白い意見が出てきた。自分の強い思いを伝えるために，あえて衣を切ってそこに書くことで，一つの芸術作品が完成したという捉え方が斬新であった。

⑶　漢詩の授業：元の中国語の発音，日本語での訓読，英語での解釈を比較した。昔の人にとっては当たり前だったことが現代人には分からない，といった感覚が共有された。『論語』に関しても，英語訳を与えたり，言葉の意味（例：徳＝The rule of propriety 等）を確認したりしたが，ダニエルは「長沮・桀溺のような抽象的な話は『むちゃくちゃ深いレベルで難しい』」と言っていた。

⑷　ＩＣＴとＡＩの活用：「国語表現」の授業では，言葉で表現した内容をＡＩに入力して画像化し，元の絵と一致するか試したり，写真からキャッチコピーを作ったりする活動を，本校生徒とダニエルが同じように行い，その成果を共有した。

４　協議

（五所川原・秋田先生）こういった形態の授業は普段から行っているのか？

（授業者）古典探究は週３時間で，そのうち２時間でダニエルへの日本文化紹介的な内容も行うことで，実質的に生徒の理解が深まることにも寄与している。彼は平仮名も読めるので，教材も平仮名にテキスト化することで朗読できた。彼は昨年度（２年次）の国語表現の授業でも学んでいたこともあり，折しも（悠仁親王の）加冠の儀と時期が重なり，そこから宮廷文化の理解が深まったこともあり，問題なく授業を展開できている。彼自身の日本文化への理解度も高く，

コメント等もすぐ書いてくれる。
（弘前南・川村先生）「花の象徴性」についてのまとめが素晴らしいが，生徒への具体的な指示や手立てはどうされていたか？
（授業者）インターネットで調べさせたことが奏功したのか，意外にみんなさらっとやってくれた。日常生活の中で「花が何かを象徴している」という感覚が自然に生徒の中にあるのかもしれない。

５　授業者による補足（イタリアの古典教育について／ダニエルとの対話から）
イタリアでは古典文学は必修だが，ギリシャ文学やラテン文学まで学ぶかは学校の種類によって異なる。最大の相違点は「口頭試問」が一般的である点で，単なる知識の確認ではなく，言語能力，構成力，批判的思考力が全教科で評価対象となり，時には１時間程度に及ぶこともあるという。
授業スタイルは大半が講義型で，教師が作家や歴史的背景を解説するが，研究者によって認められた範囲から大きく外れる自由な解釈は認められない傾向にある。
試験は前述の口頭試問のほか筆記もあり，３時間に及ぶ長文論述（大学レベル）が課されることもある。
イタリアでは教師が知識を伝え，その上に生徒が批判的思考を築くスタイルだが，日本では生徒がより主体的な役割を担い，自由に分析・解釈することが求められる。一方，日本の授業で「音楽性やリズム（音読・暗唱）」を重視する点は，ダニエルにとって新鮮かつ楽しいと感じられたようだ。また，日本語の「音便（音声変化）」がヨーロッパ諸語と似た規則性を持っていることに深い関心を示していた点は興味深かった。

６　助言者より
ＩＣＴを活用した縦書き文化の継承は，日本文学を伝える上で非常に大事な視点である。今回の実践は「花」という象徴性に絞って和歌を扱ったことで，問題設定が明確になり，深い比較が可能になった。単に「主体的な学び」として自由な感想を言い合うだけでなく，歴史的な背景や先行研究という「積み上げ」を踏まえることが，学びを深めるために重要である。寺内先生が影で行っていた入念な準備や助言が，ダニエルさんをクラスに融合させ，質の高い授業を実現させたのだと感じ入った。

部　会　の　動　き

1　令和８年度　青森県高等学校教育研究会国語部会第１回役員会
　期　日　　令和８年６月１１日（木）
　場　所　　オンライン
　案　件　　令和８年度役員改選及び承認
　　令和７年度庶務報告
　　令和７年度監査報告、決算報告
　　令和８年度予算案審議、事業計画
　　令和９年度東北大会（青森大会）について

2　令和８年度　青森県小・中・高国語教育研究協議会第１回理事会・研修会
　期　日　　令和８年７月６日（月）
　場　所　　青森市立筒井南小学校
　案　件　　各部会活動状況報告
　　令和７年度庶務報告
　　令和７年度監査報告、決算報告
　　令和８年度予算案審議、事業計画
　　令和９年度東北大会（青森大会）について

3　令和８年度　青森県高等学校教育研究会国語部会研究大会及び総会
　研究主題　「ことば」を編み、思考を広げる国語科授業の創造
　期　日　　令和８年８月１８日（火）
　場　所　　青森県立黒石高等学校

4　令和８年度　青森県小・中・高国語教育研究協議会第２回理事会・研修会
　期　日　　令和８年８月２５日（火）
　場　所　　青森市立筒井南小学校
　案　件　　令和９年度東北大会（青森大会）について

5　高教研国語部会　各地区大会（下記は担当校）
　西地区　　青森県立黒石高等学校（※県大会を兼ねる）
　中地区　　青森県立青森中央高等学校
　東地区　　青森県立八戸商業高等学校

6　第７１回東北地区国語教育研究協議会　山形大会
　令和８年度　東北地区国語教育研究協議会　第１回役員会・研修会
　研究主題　生きてはたらくことばの力をつける国語学習　～子どもの言語生活を豊かにする単元づくり～
　期　日　　令和８年１１月５日（木）
　場　所　　山形県立庄内高等学校・山形県立鶴岡高等学校・山形県立鶴岡中央高等学校・山形県立致道館高等学校

7　令和８年度　青森県小・中・高国語教育研究協議会第３回理事会・研修会
　期　日　　未定
　場　所　　未定

8　令和８年度　東北地区国語教育研究協議会　第２回役員会・研修会
　期　日　　未定
　場　所　　未定

9　令和８年度　青森県高等学校教育研究会国語部会第２回役員会
　期　日　　未定（例年は１月～２月）
　場　所　　未定
　案　件　　令和８年度庶務報告
　　令和８年度決算中間報告
　　令和９年度事業計画、予算案審議
　　令和９年度東北大会（青森大会）について

研　究　テ　ー　マ

紀要(集)	年度	研　究　テ　ー　マ	会　　場	会員数(一・二希望計)	大会参加数	大会発表者数
41	8	○新しい学力観に立つ学習指導	青森中央高校	372	205	2
42	9	○豊かな国語力を育む学習指導を求めて	八戸高校	393	267	6
43	10	○学力充実を図るための指導法を求めて	五所川原高校	367	166	2
44	11	○基礎学力の定着と応用力の充実をめざす学習指導	青森戸山高校	393	193	2
45	12	○確かな国語力を育てる学習指導のあり方	八戸西高校	377	168	2
46	13	○自ら学び自ら考える力の育成をめざして－生きる力の指導法を探る－	黒石高校	357	170	2
47	14	○国語の力を高めるための学習指導を目指して	青森東高校	353	174	2
48	15	○生きてはたらく国語の力～不易流行の視点から～	弘前高校	342	180	3
49	16	○豊かな国語力を育む学習指導のあり方	三沢高校	344	123	2
50	17	○「生きる力」と「夢」を問える国語力を求めて	青森南高校	322	138	2
51	18	○「確かな国語力」の充実を目指して	八戸東高校	297	125	2
52	19	○豊かな表現力と確かな読解力を高める授業を目指して	弘前学院聖愛高校	294	134	2
53	20	○確かな国語力と思考力の向上を目指して	田名部高校	300	103	2
54	21	○確かな国語の力をはぐくむ指導の在り方	青森高校	255	139	6
55	22	○人の中の国語　国語の中の人	木造高校	255	110	2
56	23	○「国語」の遠近法－俯瞰と回遊－	青森西高校	308	112	2
57	24	○伝え合う力を高める言語活動の充実を目指して	三本木高校	298	99	2
58	25	○「ことば」を大切にする国語教育の充実を目指して	弘前中央高校	298	134	2
59	26	○「言語活動」で引き出す主体的な学び	青森北高校	285	115	2
60	27	○確かなことばの力をはぐくむ国語学習－思考力・表現力を高める言語活動の充実を通して－	八戸高校	273	146	6
61	28	○感じる力、考える力、伝え合う力を高める国語学習をめざして	東奥義塾高校	267	115	6
62	29	○“新しい学力”を錬成する“新しい学び”の探究	青森中央高校	264	106	2
63	30	○新しい時代に必要となる資質・能力を育む国語教育を目指して	八戸北高校	248	107	2
64	1	○「言葉による見方・考え方」を働かせる国語科授業の創造	弘前南高校	264	127	2
65	3	○「確かで豊かな学びの創造 －「言葉による見方・考え方」を働かせて－	ＷＥＢ開催	245	多数	1
66	4	○「ことばの力」を育み「学びの実感」ができる国語学習をめざして	八戸西高校	224	87	2
67	5	○変化する社会に主体的に対応できる“資質・能力”の育成～ことばによる見方考え方を働かせて～	アピオあおもり	231	76	2
68	6	○たしかな「ことばの力」で、資質・能力の向上をめざして	五所川原高校	220	69	2
69	7	○ことばへの自覚を高め、理解し表現する資質・能力の育成～指導と評価への一体化を目指して～	三沢高校	210	64	2
70	8	○「ことば」を編み、思考を広げる国語科授業の創造	黒石高校	208	73	2